

© ACG プレスリリース - 展覧会開催のご案内 -



川田知志「彼方からの手紙」

Satoshi Kawata: *A Letter from A Far*



この度、アートコートギャラリーでは、2018年に続いて2度目となる川田知志の個展を開催します。

川田は、都市における空間と人、そして美術表現の関わりを、壁画を軸とする表現によって問い直しながら制作・発表を続けています。その手法は、漆喰と顔料で描く伝統的なフレスコ画の技法に現代の造形素材を融合させるとともに、特定の壁・空間からの自立や、それによって生まれる時間の流れを取り込むことで、新たな表現の可能性を探るものです。

本展では、作家自身の生きる時代を特徴づける「郊外の景色」をモチーフにしたフレスコ画から、壁画の移設技法を応用してその描画層のみを引き剥がし、カンヴァスの上に移し替えた新作群を発表します。200号大の作品を中心に、展示空間と作品、身体の関係を見極める川田ならではの構成となります。

都市近郊のどこにでもある「匿名」の風景と、固有の壁面と繋がりを持たないイメージの皮膜。両者が結びつくことで生まれる作品は、壁画とタブローの狭間で揺らぎながら「今ここ」との微妙な距離感をまとう存在として鑑賞者に差し出されます。ここではないどこか、今ではないいつか、これではない何か——「彼方」と交信を続ける川田の表現を通じて、私たちがその先に想像するのは果たしてどのような景色なのでしょう。

[画像] 作家スタジオ風景

【展覧会概要】

展覧タイトル：川田知志「彼方からの手紙」 Satoshi Kawata: *A Letter from A Far*

会 期：2022年2月26日 [土] - 3月26日 [土] *休廊：日・月・祝

会 場：アートコートギャラリー 〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F

開廊時間：11:00-18:00 [土曜日-17:00] *新型コロナウイルスの感染拡大状況などにより、会期やイベント開催予定が変更される場合があります。

◆トークイベント：2月26日 [土] 14:00-15:30 奥村一郎(和歌山県立近代美術館) × 川田知志

*予約制(先着20名様)、ご予約はメールにて承ります(info@artcourtgallery.com)。*詳細はウェブサイトにてご案内いたします。

主催：アートコートギャラリー(株式会社八木アートマネジメント) | 協賛：三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、三菱地所プロパティマネジメント株式会社

【お問い合わせ】アートコートギャラリー [担当：清澤・灰田] ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問合せ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449 E-mail:info@artcourtgallery.com www.artcourtgallery.com

川田知志「彼方からの手紙」

Satoshi Kawata: *A Letter from A Far*

◆ 作家プロフィール・作品紹介

川田知志は近年の活動において、壁画の解体・移動・再構築を一連の表現として実践する展示や^{*1}、描かれたイメージが建物の壁に覆い隠され数十年後に再発見されることを想定した作品^{*2}、壁画の移設技法「ストラッポ」^{*3}を応用して壁から剥離させた描画層を仮構の支持体にのせることで、壁画イメージの“保留状態”を作品化したインスタレーション^{*4}などを展開しています。その作品は、場との関係を強く感じさせる初期の表現から、空間から自律した「壁画」が更新を遂げていく開かれた構造を手に入れると同時に、時の流れによって入れ替わる現在・過去・未来が複雑に交差するダイナミズムを孕んだ存在へと深化してきました。

1. 2017年 ALAアーティストインレジデンス「まちとsynergism」成果展（アートラボあいち長者町 [旧玉屋ビル]、名古屋）及び自主企画「サドンデス」（龍屋ビル3F、名古屋）
2. 2018年 アーティスト・イン・レジデンス（A4 Art Museum、成都、中国）
3. フレスコ画の描画層を膠などによって画面から引き剥がし、別の支持体へ移し替える技法。17世紀以降のイタリアを中心に、主に保存修復のために用いられた。
4. 2018年 個展「Open Room」（アートコートギャラリー、大阪）

川田知志 Satoshi Kawata

1987 大阪府生まれ

2013 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻(油画)修了

| 近年の主な展覧会／滞在制作 |

- 2021 Slow Culture (京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、京都) ／01
Street Museum 2021 (東京ミッドタウンプラザB1メトロアベニュー、東京)
Kyoto Art for Tomorrow 2021 京都府新鋭選抜展 (京都文化博物館、京都)
- 2020 TOKYO MIDTOWN AWARD 2020 (東京ミッドタウン プラザB1、東京)
SUBJECT/OBJECT (ANTEROOM Gallery 9.5、京都) ／02
500m美術館vol.32 「第8回札幌500m美術館賞 入選展」
(札幌大通地下ギャラリー500m美術館、北海道)
- 2019 川田知志展「確実な晴れ。」(浄土複合 1Fウィンドウギャラリー「StandAlone」、京都)
セレブレーションー日本ポーランド現代美術展 (ボズナン芸術大学ギャラリー他)
「街と、その不確かな壁」と…。(あまらぶアートラボ A-Lab、兵庫)
- 2018 アーティスト・イン・レジデンス (A4 Art Museum、成都、中国)
川田知志「Open Room」 (アートコートギャラリー、大阪) ／03
15年 (アートコートギャラリー、大阪)
VOCA展 2018 現代美術の展望—新しい平面の作家 (上野の森美術館、東京)
まちとsynergism 2018 (旧玉屋ビル5階、愛知)
現代美術展「織り目の在りか 現代美術 in 一宮」(一宮市役所本庁舎、愛知)
- 2017 六甲ミーツ・アート芸術散歩 2017 (六甲山ホテル、兵庫) [16]
川田知志「サドンデス」 (龍屋ビル3F、愛知) ／04
ALAアーティストインレジデンス「まちとsynergism」成果展 (アートラボあいち長者町、愛知) ／05
- 2016 Artists in FAS 2016 入選アーティストによる成果発表展 (藤沢市アートスペース、神奈川)
- 2015 1floor2015 対岸に落とし穴 (神戸アートビレージセンター、兵庫)
ハイパートニック・エイジ (京都芸術センター、京都)
京都銭湯芸術祭 2015 (玉の湯、京都)

| 受賞 |

- 2020 TOKYO MIDTOWN AWARD 2020 〈準グランプリ〉
第8回札幌500m美術館 〈グランプリ〉
- 2019 平成30年度京都市芸術新人賞受賞
- 2016 六甲ミーツ・アート芸術散歩2016公募大賞 〈グランプリ〉

【お問い合わせ】アートコートギャラリー | 担当: 清澤・灰田 ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問い合わせ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449 E-mail:info@artcourtgallery.com www.artcourtgallery.com



01 《トクベナシナイト／ワニノサリアン／ケシキサリアン／スナヤモノナイト／カタヤワノジュール》2021年
顔料、漆喰、膠、水性ゴム、JESMONITE® AC730 撮影: 来田猛 | Courtesy of Kyoto City University of Arts



02 《郊外の境～Time Capsule Media 2》2020年
油絵具、麻布キャンバス、トタン板、アクリル樹脂塗料 撮影: 守屋友樹

道路沿いの看板や街路樹、団地、ショッピングモールなど、均質化した郊外の日常空間を象徴する風景の断片を、石膏ボードやトタン板などの建築資材で作られたレイヤー構造の奥にのぞかせ、都市の過去・現在・未来を想像させるとともに、人々の生活の痕跡や人為を侵食する自然の無秩序といった「ノイズ」的要素を潜ませることで、鑑賞者の個人的な記憶と作品を接続させることを試みた。



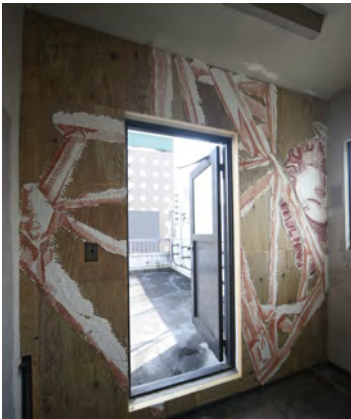
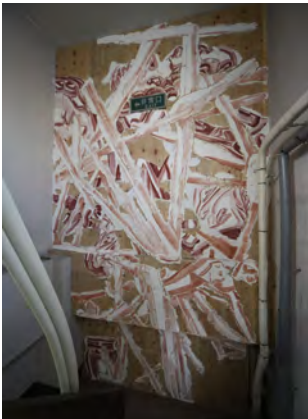
04 《サドンデス》2017年
木材、漆喰、顔料、スプレー、プロジェクター、画用紙

「撤去後の作品に新たな形を想像する必要性」を感じたことを機に、既に解体が決まっていた名古屋市内の雑居ビル内にて壁画《ノーサイド》を制作。展示後に壁画を壁ごと切り出し、別のビルへ移動させ、《サドンデス》として再構成した。また、一部の壁画は表面の凹凸を写し取ったフロッタージュへと置換された。



03 《Open Room》2018年
木材、布、漆喰、顔料 他 撮影: 表恒匡

壁画の移設技法「ストラッポ」を応用してスタジオの壁から描画層を剥離させ、木組と布による仮構の支持体にのせることで、壁から外した絵を別の場所へ再接続させるまでの“保留状態”そのものを作品化。固有の場所性が剥ぎ取られたイメージの皮膜のみが浮遊する空間を作り出した。



05 《ノーサイド》2017年
木材、漆喰、顔料、スプレー 04, 05 撮影: 怡土鉄夫

川田知志「彼方からの手紙」 Satoshi Kawata: *A Letter from A Far*

◆ 作家ステイトメント

彼方からの手紙／

彼方とは何か。その言葉自体に途方もない時間と距離を感じています。どこにいても必ず距離はあり、何をするにも時間がかかります。対象がそこにあるとして、そこからこの距離が思ってる以上に遠いほど、捉える感覚は人それぞれです。それは物理的に要した時間やその時の心情、環境に影響されながら距離を感覚に置き換えるからでしょう。西洋絵画、伝統的な技法、落書き、環境、移動、景色、郊外。どれも作品を構成する要素ですが、それぞれある程度の距離があります。それらの要素を、自分自身の時代と場所で把握し、時間をかけてその距離を埋めています。時間と距離の感じ方はそれぞれの生活環境と密接に関係しています。強く感じるほど勝手に彼方へと置かれ、雑多な感覚に紛れます。彼方との距離と時間を埋めたいわけではありませんが、その途方もなく感じる感覚を少しでも刺激できればと思っています。それは自分の存在を確認し、報告する作法でもあります。

制作方法について／

私が扱っている壁面は、イメージを壁面に単に描く訳ではなく、場所での意義や主張を持ち、空間を取り込むことでより大きな効果を発揮する表現手法です。公共空間で、その場所周辺の社会理念を現代的な感覚に当てはめて表現するため、多くの場合、その時代を象徴するものになり空間に馴染んだのち、その場所の一部になります。そこで壁面の移動に興味を持ちました。よく語られることですがタブローと壁画の違いは、建築物に直接描かれた／詰め込まれた壁画に対し、タブローとはフランス語で、布や板に描かれた持ち運び可能な可搬性のある作品を指します。そしてどの場所とも結びつきがない特徴もあります。そこで壁画を移動させた場合、条件的にはタブローの状態になります。しかし、もし移す行為自体に表現を構成する要素があったとしたら、その移設の先にある状態がタブロー化ではない新たなダイナミズムを獲得できるのではないかと考えて扱いました。今回キャンバスに移し替えます。より強力な可搬性を獲得するためです。これまで、移設を要素にしたとしても、場所との繋がり強い内容とならざるをえませんでした。作品と空間を総体的にとらえたインスタレーションで構成した結果でした。キャンバスは見る側の既視感を呼び起こし、視認してもらうための仕掛けです。そこに特別な変化を加えます。いかにタブロー化ではなく、視覚を揺さぶり、持ち込んだ場所に対し特別な結びつきが明確ではないにしろ、こちらの場所へ誘いこめるか、私なりの挑戦をします。



ドローイングについて／

近所の散歩や旅先で目に留まった様子を写真や簡単な線のスケッチで記録しています。ここ最近では、どこかしこで見られる均質化した景色からはみ出た人工的な痕跡、生活感、物同士の重なり、関係性に注目しています。溜め込んだ記録から部分的に要素を拾い上げ、抽象的に変換していきます。記録を繰り返す眺め、自身の同一性を確認しています。従来から壁面を想定した制作を行うことが多く、空間に対する身体的な動きの流れを意識して抽象的な形を作ります。空間を漂うように構成する意図は、昔雑誌で見ていたグラフィティの定番とも言える文字をねじりながら描く手法からの影響が大きいです。

